

C7 家庭科教育における「保育」領域の研究〔5〕 -教師の保育教育観(1)-
宇都宮大教育 金崎美美子 上越教育大 大瀧ミドリ
都立久留米高 桑名有米子 東京家政大家政 川合貞子

(目的・方法) 前回は家庭科「保育」領域の基本的な視点を提示し、教科書に基づいて現行の保育教育を分析した結果を報告した。その結果、①親予備軍的色彩の強い内容であること、②人間存在について多様性を欠き、画一的傾向が顕著であること、③保育における社会的視点が欠落していることなど、いくつかの問題が明らかになった。そこで今回は、これらの問題を14項目に整理し、それに対する家庭科担当教師(小・中・高)の意識調査を質問紙法によって行った。

(結果) 現場教師の保育教育観は、小・中・高における分布に顕著な差が認められ、多くの項目において、0.01%水準で有意である。また、地域については、数項目について有意である。全体的にみると、新しい保育教育を志向しようとする意識が強く、現行の「保育」領域について見直し、「教育内容や方法を学校段階別、学年別に検討し、組織しなおし、新しい保育教育を実現する方向で取り組む必要がある」と回答した者が4~5割である。これに加えて既に新しい保育教育観に立って保育教育を行っている」と回答した者は2~3割おり、保育教育に積極的な姿勢をもつ教師が「6~8割」いることが明らかとなった。また、新しい保育教育に基本的に同意しながらも、「現実にはこれを実行するには問題が多い」と慎重な回答をしたものは1割前後であった。これを学校段階別で見ると、14項目すべてについて高校教師が新しい保育教育に意欲的な回答し、「すでに行っている」と答える者の比率が高く、次いで中学校、小学校の順位となっている。しかし、実際にそれを行っているか否かについては、教育実践の場において十分に内容を吟味する必要がある。